

ドイツ通俗哲学の興亡  
—18世紀ドイツ哲学理解のために—

小谷 英生 (群馬大学教育学部講師)

哲学的問題を解くためには高度に抽象的で難解な概念とロジックを使わざるをえない一方で、明瞭かつ平易な分かりやすさが哲学には常々求められてきた。非専門家にも分かりやすい一般性やアクセス可能性が哲学に期待される以上、通俗化 *Popularisierung* は哲学のつねに大きな課題のひとつである。そしてこうした課題に応える試みを通俗哲学と呼ぶのであれば、通俗哲学はいつの時代にも存在していたし、存在すべきだといえよう。しかしながら本論文が研究対象とする通俗哲学 *Populärphilosophie* (ないしは *Popularphilosophie*) という語は歴史的な概念であって、18世紀後半のいわゆるドイツ後期啓蒙思想の一側面を指す。本発表の目的はこのドイツ通俗哲学とは何であったのか、それがいかにして興隆し、いかにして没落していったのかを描き出すことにある。

結論から言えば通俗哲学とは、フランス啓蒙主義とくにディドロの流れを汲み、専門用語ではなく日常言語で哲学することを目指すひとつの思想的ムーヴメントであった。この運動はしかし、カントの批判哲学の登場、カント学派とくにラインハルトからの断罪、そしてドイツ・ロマン派とくにシュレーゲルからの拒絶に遭って失墜していく。年代でいえば1750年代に新しい哲学として登場し、70年代から80年代前半にかけて最盛期をむかえ、あっという間に廃れてしまうのである。

通俗哲学が没落していく決定的な契機はカント哲学の登場であり、それゆえ通俗性についての批判哲学の態度を理解することが本発表のテーマにとって重要である。しかしそこまで進むと発表があまりに長くなってしまうため、口頭での補足に代えたい。